# 12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　聖書研究

テキスト　　マタイによる福音書　1章18〜25節

ルカ福音書が母マリアにスポットを当てるのに対し、マタイ福音書はあまり目立たない夫ヨセフや東方の博士たちを登場させ神の救いの約束の実現とその意味に注目を置こうとする。

**〈神の約束の実現としての選びの器〉**

マタイ福音書が夫ヨセフを登場させるのは、神の約束のダビデの子としてイエス・キリストがお生まれになったからである。20節で主の天使が神の救いの約束の実現を伝えるところで、ヨセフを「ダビデの子ヨセフ」と呼びかけている。それはマタイが既にイエス・キリストの系図において明らかにしたことであった。この御使いを通しての主の御言葉に、ヨセフは神の救いの御業の実現のための器としての彼の果たすべき使命・役割を新たにまた深く受けとめさせられたに違いない。ともするとクリスマスは、処女降誕の聖霊の御業（ルカ1:35）から母マリアに焦点が片寄りがちであるが、神の救いという点からすると、夫ヨセフの果たした役割は小さくない。このことを彼は深く自覚させられたので、マリアを妻として迎え入れ（1:24）、そして結婚してもイエスが生まれるまでは夫婦関係を自制し（1:24）、正式の嫡子としてイエスと命名したのである。

**〈律法に忠実な人〉**

マタイ福音書では神の救いの御業の筋道は読者に一目瞭然である。最初から妻マリアの妊娠は聖霊の御業による奇跡であることが述べられている（1:18）。マリアはそのことを直接御使いから説明を受け、彼女自身の信仰をもって同意し受け入れた（ルカ1:38）。けれども、ヨセフにはそのことは未だ知らされていない。おそらくマリアもすべてを神に委ねて、受胎告知（ルカ1:28〜33）のことをヨセフには語らなかったのであろう。それ故に、夫ヨセフは大いなる苦悩に陥る。未だ婚約中とはいえ、ユダヤの律法では結婚関係と同様と見なされ、婚約中の他の男性との関係は姦通と同罪とされたのである。彼の苦悩を深めたのは妻マリアへの不信だけではなく、彼の神の律法へのこの忠実な態度にあった。マタイは夫ヨセフを「正しい人であったので」と、その苦悩の真の理由を述べる（1:19）。マリアへの愛とユダヤの掟との狭間に彼は立たせられ、律法を重んずるヨセフは密やかな離縁を決断し、自ら身を引こうとすることで問題の解決を図ろうとする。人間的にはこれ以上の解決の手だてはなく、まさにギリギリの選択であった。

**〈神、我らと共にいます、インマヌエルの恵み〉**

このジレンマ・人間的な解決に終止符を打ち、さらなる上よりの神による解決へと導いたのが、御使いによる神の介入の御業であった。この主の天使の介入によってことの真相は明らかにされ、夫ヨセフもまた神の救いの約束の実現の器として神の御業へと招き入れられる。ヨセフは、妻マリアへの村人のいわれなき中傷やユダヤの掟による断罪の危険からマリアを守り、マリアがイエスを無事出産することを助ける役割を、神によって与えられていく。

ヨセフの役割は、確かにマリアのそれに比べて補助的なものでしかないとしても、このヨセフの同意と協力がなければマリア一人で何もかも困難を背負い、挙げ句の果てに石打ちにされて殺されてしまう恐れも十分にあったのである。マタイがイエスの名前を「インマヌエル（神、我らと共にいます）」としているのは、もちろん旧約聖書のメシア預言の成就（イザヤ7:14）であるが、そのようにしてマリアやヨセフと共に神がいてくださって人間的な解決や様々の危険から彼らを守り、そうして神の約束が彼らの信仰を通して実現されるためにほかならなかった。そして、このヨセフとマリアにおいて成された神の救いの御業は、さらに約束の民イスラエルの救いの実現へと進展していくことになる。まさに主の御名インマヌエルが、約束の民において、このお方によって実現されるのが、神の御心なのである。（山下朋彦）

※第19号（2005年10・11・12月号）110ページより、再掲載です（編集部）。

## 12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　説教展開例

テキスト　　マタイによる福音書　1章18〜25節

**〔単元のねらい〕**

カリキュラムの単元目標には、こうあった。「神は我々と共におられる、インマヌエルの訪れを喜ぼう」と。その訪れを唐突に告知されたヨセフは、はたして喜べたであろうか。聖書は彼の許嫁マリアの身に起こること、そして彼の戸惑いと悲しみを隠し立てしない。婚約期間中の男女の間に割って入るようなインマヌエルは、まずこの二人にとっての喜びとならなければ、われわれの喜びにはなり得ない。そのプロセスを丁寧に、現実味をもって物語りたい。

# 「その子をイエスと名づけなさい」

『い・い・な・ず・け』って、知ってる？。

「ハイ！ ハイ！ ぼく知ってるよ。おかあさんがご飯といっしょに出してくれる、あれでしょ。お水をいっぱいふくんでて、やわらかく、おいしい、みどりのお野菜。食べたことあるもん。」

あっそう！ 食べられるんだっけ？『いいなずけ』。

「やーねえ！ それって、野沢菜づけでしょ！お漬けものじゃあないのよ、いいなずけって。生まれたばかりのあかちゃんに、おとうさんがステキなお名前をつけてくれることよ。そうに決まってるわ。さっき読んだ聖書にあったじゃない！その子をイエスと名づけなさい、って。」

なるほど！ ふたりともスゴい想像力だね。

『いいなずけ』っていうのはね、結婚を約束している男の人と女の人のことなんだ。聖書の時代、ユダヤの国では、一人の男の人、またはそのお父さんやお母さんが、お嫁さんになってほしいと心に決めた女の人とその家族のところへ、贈り物を持ってお願いに行ったそうです。「あなたを花嫁としてお迎えしたいのです。」「わかりました。花婿になってくださる方のところへ参ります。」そんな約束をした二人は、家族からも町の人々からも『いいなずけ』と呼ばれるようになるのです。婚約から結婚までの期間は長くても1年、みんなから見守られ、助けられて、二人は結婚に向けて備えをするのです。婚礼の儀式のこと、住む家のこと、家庭のこと、仕事のこと、将来の夢など、これからの希望をいっしょに考えることができる喜ばしい間柄、それが『いいなずけ』なのです。今日の聖書に登場する、ヨセフさんという男の人と、マリアさんという女の人も、そのような『許嫁（いいなずけ)』の間柄でした。

ある日のこと。ヨセフさんは、マリアさんから、秘密を打ち明けられます。「ヨセフさん、今からお話しすることは、きっとあなたを驚かせてしまうでしょう。でも、話さずにはいられないのです。他の誰かに知られる前に、あなたにだけは、本当のことを知っていてほしいのです。ふた月ほど前、神の御心を伝える天の使いが現れて、こう言うのです。『おめでとう、マリア。主があなたと共におられる。恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名づけなさい。』……まだ結婚もしていないのに、どうしてそんなことがあるでしょう。そう申し上げると、天使はまたこう言うのです。『聖なる神の霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なるもの、神の子と呼ばれる。』……天使の告げた言葉のとおり、わたしは今、子を宿しています。」

ヨセフさんは、目の前が真っ暗になってしまいました。まだ結婚していないのに、婚約者から、子どもができたと告げられたのです。マリアさん

は、結婚の約束を破って、他の男の人と結婚してしまった、そう考えるしかないのです。ヨセフさんの驚きと哀しみは、どんなに大きかったことでしょう。それでも、ヨセフさんは、マリアさんを愛していました。自分の気持ちよりも、彼女のことが心配になりました。もしもこのことが世間に知れたら、彼女は掟によって裁かれてしまう。姦淫の罪を咎められて、石で打ち殺されてしまう。彼女のことを誰にも知られないようにしよう。ひそかに相手の男の人のところへ去らせよう。自分は結婚をあきらめよう。ヨセフさんはそう心に決めたのでした。

まるで悪い夢でも見ているような、しかし紛れもないその現実を背負って、重い重いその心を引きずって、ヨセフさんは生きてゆくしかありません。眠れない夜がどれほど続いたことでしょう。それでもようやく、疲れきって眠ることができました。その眠りの中に、夢の中に、あの天使が現れたのです。

天使はまず、こう呼びかけました「ダビデの子ヨセフ。」……ヨセフさんのお父さんの名は、ヤコブでした。ヤコブの子なのに、ダビデの子と呼んだ天使は、人違いをしたのでしょうか。そうではありません。ダビデの子と呼ばれたヨセフさんは、ドキッとしたでしょう。それは、メシア（キリスト）の呼び名だったからです。一千年むかしのイスラエルの王ダビデは、ヨセフさんの先祖でした。王国は滅びてしまいましたが、再びその王国を興すダビデの子メシアが現れる。そう言い伝えられてきたのです。そのダビデ王の子孫として、天使の言葉を聴くようにと、ヨセフさんは導かれたのです。

そこで天使は、こう告げました。「恐れるな、ヨセフ。マリアを妻として迎えなさい。マリアのおなかの子は、聖なる神の霊によって宿ったのだ。彼女は男の子をうむ。その子をイエスと名づけなさい。」……驚きました。マリアさんの打ち明けた秘密、あれはすべて作り話だと疑っていたからです。マリアさんに告げられたことと、まったく同じ言葉を、ヨセフさんは確かに聴きました。そして、信じたのです。いま聴いた言葉を、マリアさんも確かに聴いたのだと。そして、悟ったのです。人間には絶対できないことを、その言葉どおりに実現なさる方こそ、紛れもなく真の神さまなのだと。

消えかけていた結婚の望みが、再び現れてきました。ひとすじの光が、ヨセフさんとマリアさんのあいだに射し込んできたのです。それは、二人に告げられた一つの言葉を、神さまの言葉と信じて、従うことによって訪れる、まったく新しい希望でした。

「恐れず、妻マリアを迎えよ」という御言葉に従うことは、ヨセフさんにとっては、婚約中にできた子どもを、自分の子どもとして引き受けるということです。「マリアの宿した子は、聖なる神の霊による子（神を父とする子）である」という御言葉を信じることは、ヨセフさんにとっては、夫である自分を捨てるということです。「マリアの産む男の子をイエスと名づけよ」という御言葉に従うことは、その子を養い育てる父親になるということなのです。……そんな無茶苦茶なこと、普通ならできる訳がありません。ところが何と！ ヨセフさんはそうしたのです！ まったく新しい希望がそうさせたのです！

「イエス（イエー・シュアー）」という名は、「主こそ救い」という意味です。「この子は自分の民を罪から救う」と告げられたのは、その名の通りの働きをする「救い主メシアが生まれる」という意味なのです。人の罪は命を滅ぼし、世の罪は国を滅ぼす。そんな罪と滅びから救ってくださる神が、人となって世においでになる。神が我々と共にいてくださる。この希望だけが、ヨセフさんとマリアさんを結ぶ絆でした。

いいなずけとしての希望や喜びは、救い主の誕生によって、ひとたびは、木端微塵に打ち砕かれました。しかし、その代わりに、罪と滅びから救う神が共にいてくださるという、その子をイエスと呼ぶ者たちの新しい希望と喜びが訪れたのです。

（二宮　創）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 1章32節

その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。

# 12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　幼稚科

**〈ねらい〉**

ヨセフもマリアも、主の天使の言葉を聴いて、神様のひとり子が、聖霊によってマリアに宿っていることを信じ、天使の言葉に従った。そして、イエスさまがお生まれになられた。イエスさまのこのお誕生を共に喜ぶ。

**〈展開例〉**

物語（絵本）の読み聞かせ（126ページ参照）。

場面ごとの対比を強調するため、見開きのページを最初から見せないで、お話に合わせて開くと良い。

**【イエスさまのお誕生】**

①今から、2000年くらい前のことです。ユダヤのナザレという町に、ダビデ家のヨセフという人が住んでいました。ヨセフには、結婚を約束している大切な人がいました。そのおとめの名前はマリアといいました。

②ある日のことです。マリアのところに天使がやって来て言いました。「おめでとう、マリア。主があなたと共におられます」。マリアが、びっくりして、いったいこれは何のことだろう？と考えていると、天使は言いました。「恐れることはない。あなたは神様の恵みを受けました。あなたは、聖霊によって赤ちゃんを身ごもります。そして、あなたは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。その子は神の子と呼ばれる」。マリアは天使の言葉を信じて、言いました。「わたしは、主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」。

③そして、本当にマリアは赤ちゃんを身ごもりました。マリアはそのことを、ヨセフにお話ししました。今度は、ヨセフがびっくりしました。まだ、結婚をしていないのに、マリアに赤ちゃんがいることが人々にわかったら、大変です。マリアは石で打たれて殺されてしまうのです。ヨセフは正しい人でした。

④ヨセフは、よく考えてこう決めました。人々にわからないようひそかにマリアと別れよう。夜になりました。ヨセフは、大切なマリアのことを考えているうちに眠ってしまいました。ヨセフは夢を見ていました。すると、その夢の中に主の天使が現われ……、「ダビデの子、ヨセフ。恐れないで、マリアと結婚しなさい。マリアのおなかの赤ちゃは、聖霊によって宿ったのです。マリアは男の子を産みます。その子をイエスと名付けなさい。その子は、ご自分の民を罪から救うからです」。

⑤ヨセフは、目が覚めると、夢の中で主の天使が命じたとおり、マリアと結婚しました。そして、男の子が生まれると、その子をイエスと名付けました。こうして、神様のひとり子イエスさまが、お生まれになりました。神様が、ずっとずっと昔から約束してくださっていたことがとうとう実現したのです。

⑥イエス様のお誕生おめでとう。

**〈お祈り〉**

てんのおとうさま。ヨセフさんの家に生まれた男の赤ちゃんは、神様のひとり子、イエスさまでした。わたしたちの救いのためです。ありがとうございます。イエスさまによって、アーメン。

## 12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　小学科下級

**〈ねらい①〉**

説教を振り返り、ヨセフを生かした救い主誕生の希望を確認する。

**〈展開例〉**

今日のお話は、みんなもよく知っているヨセフさんとマリアさんのお話だったね。ヨセフさんがどれだけ辛い気持ちだったことか、みんなにも分かりましたか。でもヨセフさんは、やけっぱちにならないで、マリアさんを守って結婚できたから良かったですね。ヨセフさんの暗い心を照らしてくれたのは、マリアさんから生まれてくる赤ちゃんが神様の独り子、救い主イエス様なのだという希望でした。この希望が、どんな暗い心も照らすのです。

**〈ねらい②〉**

預言聖句を確認し、救い主預言が成就した驚きを味わう。

**〈展開例②〉**

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む……」。この預言は、聖書のどこに記録されているのか確認してみよう。

正解は、イザヤ書７章14説でした（p1071）。これはイエス様が生まれる700年以上も前に与えられた預言なのです。

**〈ねらい③〉**

インマヌエルの喜びを分かち合う。

**〈展開例③〉**

今日のお話にはインマヌエルという言葉が出てきましたね。「神様は私たちといっしょにいてくださいます」という意味です。神様はマリアやヨセフといっしょにいてくださって、色んな難しい問題を解決してくださいました。そして神様は、今私たちと、いつもいっしょにいてくださいます。聖霊において、私たちの心に宿っていてくださいます。それはクリスマスにお生まれになったイエス様が教えてくださったことです。私たちと同じ姿で、私たちに近づいてきてくださったイエス様を見るなら、本当に神様は私といっしょにいてくださるんだって、きっとよく分かると思いますよ。

みんなは、神様がいっしょにいてくださるって、強く感じたことあるかな？（それぞれのご経験を分かち合ってください）目を瞑って、手を伸ばせば、必ず神様がその手を握ってくださるよ。

**〈祈り〉**

神様。ヨセフさんの暗い心を明るくした、救い主イエス様の希望が、私たちの心も明るくしてくれます。ありがとうございます。神様、いつもいっしょにいてくださってありがとうございます。苦しいときも、悲しいときも、どんなときもいっしょにいてください。勇気を与えてください。

# 12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　小学科上級

**〈ねらい〉**

神を信じることが、人を信じる力と勇気を生み出す。神に押し出されてマリアを信じたヨセフの姿に学ぶ。

**〈展開例〉**

マリアは、聖霊によって身ごもるという、神の不思議なみわざを受け入れて、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」と答えました（ルカ1:38)。謙そんに自らを神のくすしきみわざの器として差し出しました。マリアの夫ヨセフには、どのような神のみわざが与えられたのでしょうか。

マリアに主の御使いが現れて、けれども、おそらくマリアは、そのことをなかなかヨセフに伝えることができなかったのではないでしょうか。婚約して、夫婦の誓いは交わしたといっても、まだ一緒の結婚生活が始まっていたわけではありません。それなのに、御使いが現れて「身ごもる」と告げられたなどと、どうして信じられるでしょうか。ヨセフが信じてくれるかどうか、マリアには自信がありませんでした。この夫婦に、まだそこまでの信頼関係はなかったのです。そして、どのようにヨセフに伝えようかと考えて、ぐずぐずしているうちに、おなかがふくらみ始めて来たのでしょう。

身ごもったことを知ったヨセフは、ひそかにマリアと縁を切ろうかと考えました。御使いが現れて「聖霊によって身ごもる」と告げたなんてことは、信じられないからです。御使いが現れるということが不思議なことであるというのは、今も昔も変わりません。ヨセフにも信じられないことでした。そして、夫の知らないところで身ごもるなど、ヨセフにとって考えられないことでした。ヨセフは、もはやマリアを信じることができないという状況だったのではないでしょうか。

そんなヨセフに、主の御使いが現れてくださいました。御使いは、「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」と言って、マリアの言葉が正しいことを告げました。マリアを信じなさい、信頼しなさいと告げました。そして、ヨセフは、まことの神を信じる正しい人でした。神の御言葉を信じるから、ヨセフは、マリアを信じてマリアを迎え入れ、一緒に生活し始めました。生まれて来る男の子を自分の子どもとして受け入れ、生まれたことを共に喜び、共に生きたのです。

ヨセフとマリアの夫婦は、最初から強い夫婦だったのではありません。弱くもろい、ヒビが入りそうな夫婦でした。妻のことを信じられないと思ってしまう夫でした。けれども、信じられないと思ってしまう時に信じてこそ夫婦なのです。神の御言葉に励まされて互いを信じることに立った、このステキな夫婦に救い主の両親となる幸いが与えられました。これは、主なる神からの大切なメッセージです。

皆さんも、信じていたお友だちに裏切られたり、何か信じられないという出来事を経験するかもしれません。けれども、信じられない時に信じることこそが大切です。救い主イエス・キリストは、罪を犯し神を裏切り続けている罪人を信じて、神の御前に立ち帰ることを期待して、十字架につけられてくださいました。信じることに立ち続けたお方が救い主なのです。

皆さんも、人間関係がだんだん複雑になってきているでしょう。人に傷つけられることもあるでしょう。悔しく思うこともあるでしょう。それらは、生けるまことの神がすべてご存じです。主なる神は、十字架のイエス・キリストによって、わたしたちに、なお信じることに立ち続けなさい、とおっしゃっておられます。人を信じる力は神を信じることから来るのです。

**〈お祈り〉**

神さま、信じることのできないわたしたちに、信じる力と勇気をお与えください。神さまに依り頼んで、人を信じることができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

# 12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　中学科

**〈ねらい〉**

〇イエスの誕生の経緯を学ぶ。
〇イエスの名に表された神の救いの奥義を学ぶ。

**〈展開例〉**

**質問(1)**　ヨセフと婚約していたマリアは、どうなったか。

**質問(2)**　それに対し、ヨセフは最初どうしようと思ったか。

**質問(3)**　夢に現れた天使は何と告げたか。

**質問(4)**　イエスは、なぜインマヌエルと名付けられたと思うか。

**質問５**　ヨセフは、眠りから覚めた後、どうしたか。

**まとめ**

イエスの母マリアは、ヨセフと婚約していたが、聖霊によって身ごもった。イスラエルの律法では、婚約している状態で、娘が身ごもれば、石打ちの刑で殺される危険もあったので、ヨセフはひそかに縁を切ろうとしたが、主の天使が夢で現れ、マリアを迎え入れること、マリアに宿っている子どもは聖霊によるものであること、その子の名をイエスと付けるべきことを告げる。このことは、インマヌエルと呼ばれるメシアの到来の預言が成就するためであった。ヨセフは、夢から覚めると、天使の命じた通りに、マリアを迎え入れ、子どもが生まれた後、その子をイエスと名付けた。

イエスは、旧約で預言されていた救い主メシアとして無防備な赤ん坊の形を取って、地上に降りてこられた。イエスという名前は、「主は救い」という意味であり、預言にあるインマヌエルとは、「神は我々と共におられる」という意味であるが、これらの名前は、神の救いについての奥義を言い表している。赤子のイエスは、まことに神の救いとして犠牲となるためにお出でになった。この方は、天にある栄光を捨て、私たち人間と同じように肉の体を持って私たちの世界で私たちと共に生きて、とことん私たちの弱さや苦しみや闘いを味わってくださった。はるか天上から下界を見下ろす神なのではなく、まことに私たちと共にいてくださる方であった。私たちと共にいてくださって私たちを救う方、それが約束のメシアであるイエスであった。

**〈祈り〉**

神様、イエス様を地上に送ってくださって、ありがとうございます。自分たちの力では到底救いを得ることのできない私たちのために、あなたは、赤子としてイエス様をこの地上に送ってくださいました。あなたの深い御愛に感謝いたします。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。